

IEEE 125th Anniversary Region 10 Student Congress 2009 報告書

慶應義塾大学 Student Branch

Chair 清水 翔

このたび、2009年7月16日から7月19日までシンガポールのシンガポール国立大学(National University of Singapore: NUS)で行われたIEEE Region 10 125th Anniversary Student Congress 2009に参加しましたので、その報告をいたします。

1. 会議概要

IEEE Region 10 Student Congress (以下、IEEE R10 SC) は、Region 10と呼ばれるアジア・パシフィック地域のStudent Branch (以下、SB) の代表者を各国から集めて2年に一度行われるR10のSB全体の会議です。今回は、インドのMadrasで2008年に行われています。今回は、IEEEの125周年の年に当たるため、通常の隔年開催のスケジュールから外れて2年連続の開催となっています。ホスト校のNUSとインドのCollege of Engineering, ChengannurのSBが運営を担当していました。

今回、日本からは、北海道大学、東京工業大学、東京電機大学、慶應義塾大学、静岡大学、名古屋大学、京都大学、熊本大学の計8大学から10人が参加し、会議全体では150人程度が参加していたと思います。過去IEEE R10 SCに参加した先輩からの話で、インドはSBの活動が活発だという話を聞いていましたが、実際に今回の会議にもインドからの参加者が一番多かったように感じました。

2. 会議内容

7月16日: 1st Day

<午前>

● Ice Breaker Session

全てのイベントの前に、参加者間の交流のきっかけを作る意味を込めて自己紹介を兼ねて簡単なゲームを行った。参加者全体を何組かに分けてパラレルで行われたが、私の参加した組では、自分の身に付けているもののうち大事なものの2つについて、それが大事な理由やそれが何であるかを説明するというゲームであった。



Ice Breaker Sessionの様子



Ice Breaker Session後の集合写真

<午後>

- IEEE Student Workshop on Green Power / Sustainable Development

「田舎において持続可能な開発を行うグリーンテクノロジーのプランを提示する」というテーマでグループワークを行った。最終的にはA4で5ページ以内のレポートにまとめてその日の20:00までにメールで事務局に提出するのが課題であったが、どのチームも作業時間として与えられた時間内に終わることができず、締切が結局翌日の朝6時まで延長されたこともあり、Formal Dinner後に各グループとも集まって夜遅くまで議論することになっていた。



グループワークの説明

- Inauguration Ceremony

IEEEの幹部(Dr. Lewis Terman, Mr. Joe Lillie, Dr. Richard Gowen), R10の代表者(Prof. Mini Thomas, Prof. YJ Park)による開会の挨拶があり、今年125周年を迎えるIEEEの位置づけやIEEEの中でのR10の重要性、また本会議の位置づけなどについて話があった。

- World@2020 – A Vision of the Future

IBM, Google, Shell, A starなどという企業や研究所からの来賓の方からのスピーチが行われた。これから先、各企業などのようなことを目指していくのか、それに当たってどのようなことが重要になってくるのかなどということに焦点が当たった講演であった。

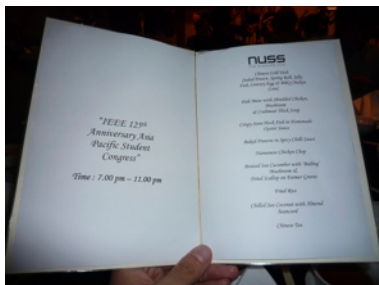


ケーキカットの様子

<夜>

- Formal Dinner

初日の夜は、レセプションが行われた。中華料理のコース料理で、同じテーブルに着いた出席者と話しながら食事をした。また、その合間には、楽器演奏やR10のSB活動について与えられる賞の授賞式が行われた。賞については、インド並びにオーストラリアのSBがいくつも賞をもらっており、アクティビティの高さを感じた。



メニュー



料理



楽器演奏

7月17日: 2nd Day

<午前>

- IEEE@125

- Regino 10 Briefing on SAC Goals & Objectives by Prof. Mini S. Thomas

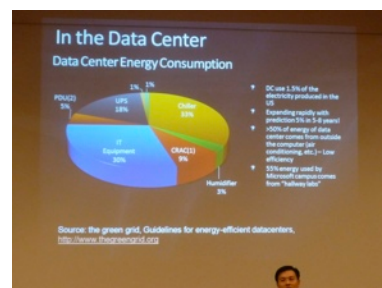
- Leadership Talk by Mr. Joe Lillie and Mr. Alan Street

IEEEの幹部や、R10の代表者から、IEEEのこれまでの歴史などが紹介されIEEEがどれだけ社会的に大きな役割を果たしてきたのか、また、R10がIEEEにおいてどれだけ大きな役割を担っているのかが語られました。特にSB活動については、R10の占める役割が大きく、全10 Region中、SB数が最大であることなどが紹介されました。特に驚いたことは、インドのSB数が420もあり、また、Graduate Student MemberよりもStudent Memberの方が圧倒的にインドの場合は数が多いということは日本の状況とはだいぶ違うと感じた。

<午後>

- ISBIR (IEEE Student Branch Industry Relations)
- Speech on Green IT by Microsoft
- IEEE Humanitarian Technology Challenge (HTC)

HTCでは、人道的面をサポートする研究がいくつか紹介された。特に印象に残っているのは、インドでの井戸などの穴に幼児が落ちてしまい、気がつかずになくなってしまいうことを防止するためにカメラを付けたはしご?のようなものを設置するするという研究であった。このセッションでは、日本と他の国の環境の違いにより研究の対象が大きく変わってくるのだと感じた（日本では人道面からそれを改善するという研究は少ないように感じるので）。



Microsoftの講演

<夜>

- Singapore Tour

行き先毎に4グループ(City Hall, Orchard Road, China Town, Clarke Quay)に分かれて、シンガポールの市内観光を行った。私は、Clarke Quayを選択し、川沿いの眺めのいい中華料理屋で夕食を食べ、周辺を散策しつつSingapore Food Festivalで出ている屋台群でビールを飲みながら、計画的に都市開発が行われてきたシンガポールと、計画的に行われてきたのかが疑問符が付く日本の都市計画の違いを感じた。



川沿いの出店



屋台群



奥に逆バンジージャンプ

7月18日: 3rd Day

<午前>

- Innovative and Best Practice Around the Region

R10以外の、各RegionからのStudent Representativeを招いて、それぞれのRegionにおいてどのような活動を行っているかの紹介が行われた。いくつかのRegion(特に北米)は、Micromouse

コンテストというのをやっているとのことで興味を持った。活動があまり活発ではない慶應義塾大学SBとしては、このような情報を元に活動の活性化のきっかけとして見習うべきところが多いと感じた。

- IEEE Discussion Forum – Future of IEEE Student Branches

IEEE Student Branchのミッションは何であるかを言葉にしてまとめるというグループワークを行った。10以上のグループからそれぞれに考えた、ミッションステートメントを発表したのだが、多くのグループでHumanityという言葉を入れていて、自分の普段の活動ではそのような事を意識したことがなかったので新鮮であった。



各Regionからの活動報告

<午後>

- Break Out Session

Break Out Sessionでは、5つのテーマに分かれて少人数でディスカッションを行った。私は、GINIのセッションに行き、GINIがどのような目的のために設立されて、どのような構成を取っているのか、これからどのように拡大していく予定なのかの説明を受けた。これまでは、インド周辺諸国とニュージーランドに限定されたネットワークであったが、今年中にネットワークを拡大する予定であり、Tokyo Sectionも拡大予定セクションに含まれているようであったので、これからどのように関わっていくかは慶應義塾大学SBとしても検討しなくてはならないことであると感じた。



ミッションステートメントの発表

- Poster Presentation

展示を希望しているSection, SBがブースをもらい各々の活動を紹介する時間が与えられた。また、同時にグリーン技術に関するポスター発表も行われており、参加者がよいと思うポスターにポストイットを貼り、表彰の審査を行った。



ポスター発表の様子

- Mechatronics: A Status Report and Future Prospects by Prof. Masayoshi Tomizawa

<夜>

- Multicultural Night

夜は、Multicultural Nightということで、何か舞台上でパフォーマンスをやりたい国 or Section 毎に自国の歌や、ダンスなどを披露した。日本チームはというと、前日の観光が終わったあとに集まって、このMulticultural Nightで何をするか3時近くまで話し合っ、熊本大学のデニスさんを横綱とする相撲をすることにしていた、結局1番手でパフォーマンスを行った。外国人が飛び入りで参戦したりして予想以上に盛りあがったのでとても良かった。他の国は、インドやパキスタンの人たちがノリノリでダンスをして、これも予想どおり飛び入りでいろいろな人が輪に加わっていた。また、台湾人は雑伎団もびっくり?の技を披露していた。一番印象的だったのは、「政

治的には関係の悪いインドとパキスタンだけど、ここじゃ関係ないよ！」ということをして、一緒になって踊って盛り上がっていたことだった。

7月19日: 4th Day

<午前>



日本チームの相撲



台湾チームの雑伎



インドチームのダンス

IEEE Mentoring Programme

● IEEE@2020

IEEE幹部による、これからIEEEがこれまでどのような存在であって、これからどこに向かうべきか、また、IEEEにとってのStudent Branchの活動の意義は何であるかといった話題についてのパネルディスカッション。

● Closing Ceremony

前日に行われたポスター発表やGreen technologyについてのプレゼンテーションの優秀者に対する授賞式や、参加者がそれぞれに持ってきたプレゼント交換のイベントをして、全てのイベントを終了した。



プレゼント交換

3. 感想

先輩から過去どのようなようであったのかを聞いてはいたが、IEEE Student Congressには初めての参加であったので、どのような雰囲気なのか、どのようなことを行うか、など多少不安もあったが参加してみたら（予想外に連日、3時過ぎに寝て7時頃起きるという睡眠不足生活になったり、配られてスケジュールと違う進行になったり、インド人たちが全く集合時間を守らなかったり、バスが時間どおりに来なくて待ちぼうけを食らわせられたりという不満も多少あるが）普段の研究での国際会議発表とはまた違った形で他国の人たち、また、普段はあまり関わりのない日本国内の他大学のSBの人たちと交流できて面白かった。講演などを聴いていて感じたのは今年125周年を迎えるIEEEの歴史とその組織の大きさ、また、それを支える人たちの努力の上に今の自分たちがいるんだなということを再認識するとともに、IEEEの幹部の人たちがStudent Branchの活動について次世代の人材を育てる基盤として大切にしている姿勢が感じられた。

今回、IEEE R10 SCに参加して一番驚いたことは、インドのSBの活動の活発さである。まず、SBの数からして420と他の国を圧倒しているだけでなく、インドでは大学院生よりも学部生の会員の方が多という事実が驚いた。日本、とくに、私の周りで考えてみるとIEEEに入会するというのは、大学院生になって研究を進めていく過程で国際会議などに参加するに当たって会議の登録費

が学生用に安くなるからというのがモチベーションとして大きいように感じるので、学部生の方が会員数として多いという事実はとても意外であった。インド並びに周辺諸国の参加者数や活動の活発さを考えると、日本を含めた東アジア諸国の今後の活動は押されていると感じたので、今後新しい枠組みであるGINIなどを通じて積極的な活動に繋げていけたら良いなと自戒の念も込めながら思った。

日本では、SNS=mixiというような状況である一方、国際的にはSNS=Facebookという状況であるということは知識では知っていたが、今回のIEEE R10 SCに参加してみて、名刺交換やメールアドレスを聞いた次には、「Facebookのアカウント持っているか?」とか「Facebookにはこのメールアドレスで登録しているのか?」とか「Facebookでもリンクしておくぞ」などという会話がしょっちゅう行われていて、日本と他の国との状況の違いを感じるとともに、これまで放置気味であったFacebookのアカウントがやっと役に立つときが来たので、この会議でできた繋がりをFacebookを使いながら今後も維持していきたいと思う。

最後に、今回このような機会を与えた下さったIEEE Japan Councilの皆様、慶應義塾大学 Student Branchカウンセラーの笹瀬教授、また、IEEE R10 SCへの参加を認めて下さった山中教授をはじめとする山中研究室の皆様にご挨拶いたします。また、このようなすばらしいStudent Congressの運営を行ってくれたホスト校のNational University of Singapore, College of Engineering, Chengannurの皆様にも同様に感謝いたします。